■特集■戦後七〇年に考える

口惜しさは——大内與五郎のシベリア抑留詠

本田一弘

二〇一五（平成二十七）年四月三十日、厚生労働省は、第二次世界大戦後にソ連が設置した収容所などで死亡した日本人抑留者のべ一万七二三人の名簿を新たに公表した。戦後、ソ連はポツダム宣言に反して武装解除を受けた日本兵ら約六十万人を、シベリアなどの収容所に抑留し、道路・鉄道建設や伐採作業などの重労働に従事させた。抑留者らは厳寒の中、満足な食事や休養を与えられないまま、過酷な労働を強要され、栄養失調などで約六万人が死亡したといわれている。

＊

・口惜しさは耐ふるより無き俘虜の日に続きて永きわが精神史

大内與五郎『海門の雲』

口惜しさは耐えるよりほかしかたがないのだ、俘虜の日からずっと長い間変わることなく続いている私の精神の歴史よ。俘虜として囚われた日々に味わった「口惜しさ」を長い間抱えてきた人間のふかい鬱屈、断念、そして沈黙がこの歌には刻まれている。

『海門の雲』（昭和六十一・三　九藝出版）は、大内與五郎の第二歌集。大内には二冊の歌集があり、第一歌集『極光の下に』（昭和四三・九　新星書房）は、第十三回現代歌人協会賞を受賞している。大内は『現代短歌大事典』（三省堂）にもとりあげられている歌人ではあるが、その人となりや作品について知る人は恐らく少ないだろう。以下、大内の経歴を簡単に記したい。

オオウチヨゴロウ。一九一七（大正六）年、茨城県那珂湊（現在ひたちなか市）生まれ。旧制水戸中学卒業。昭和十三年三月、満州に渡る。ハルピンで会社勤務（とあるが『海門の雲』の「あとがき」に二年半の兵役をハルピンと国境の街満州里ですごした、との記載があることから兵役に従事していたと推察する。なお、除隊後の昭和十五年以降もハルピンに住んでいる）。昭和十六年、山本友一の歌集『北窓』を読んだことがきっかけで、同年十二月、国民文学へ入社。松村英一に師事。昭和二十年四月に応召され、牡丹江鉄道第二十連隊に配属される（予備役陸軍工兵軍曹）。応召のため、国民文学退社。八月敗戦。武装解除となったが、ソ連軍に囚われる。昭和二十年十月から昭和二十三年六月まで、シベリアのタイシェット地区捕虜収容所等に抑留される。昭和二十三年六月、復員。国民文学に再入社。昭和二十五年一月、第一回半田良平賞受賞。昭和三十三年一月、国民文学第一同人。昭和四十三年九月、第一歌集『極光の下に』を刊行。昭和四十四年、同書により第十三回現代歌人協会賞受賞。戦後は福島県いわき市で暮らした。福島県歌人会常任委員や福島県歌人会会長（昭和